教育理念の再検討

—リベラルアーツを中心に—

飯　　謙

0．はじめに

神戸女学院における教育の特徴として、キリスト教の精神、国際理解、女性教育、少人数教育、リベラルアーツの五つがあげられてきました。最初の三つ、すなわち、キリスト教の精神、国際理解、女性教育は、神戸女学院大学学則第1条「本大学は、キリスト教の精神を教育の基本とし……民主的教養と国際的理解とを有するキリスト教的女性を育成することを目的とする」に明確に述べられています。これら三点は、いずれも明治期の日本になかったものを補う働きがあったと思われます。わたしなりに翻訳すると、それぞれがどのように対応するかは別として、自己相対化、隣人の受容、弱い立場にある方々との共生の志、ということになると考えております。後に言い及びますが、キリスト教的な意味で神を考えるポイントの一つは「自己相対化」の視点にあると申せます。自己相対化とは自身をひとたび全体の中に置き直してみる手続きであり、それは「神の視点」であるとも言えるからです。国際理解にも当然その志向が認められます。「隣人の受容」にも、あの「隣人を自分のように愛しなさい」という「黄金律」をもちだすまでもなく、キリスト教との、さらには国際理解との重なりが認められます。女性教育を「弱い立場の方々との共生の志」と枠づけることにはご批判もあるかと思いますが、米国の女性大学で注目された「女性的な認識法」(Women's Ways of Knowing) という視座——これは公正や権利といった、どちらかといえば攻撃的な視座ではなく、配慮や責任を志向する判断と定義づけられる視座（坂本，pp. 140f.）と、それから上に述べたキリスト教や国際理解の精神との関連から示唆を得たものですが、これを展開させるのは別の機会に譲ることとします。

後半の二つは、神戸女学院の寄附行為や大学の学則に明示されているわけではありませんが、少人数教育とリベラルアーツは、キリスト教の精神、国際理解、女性教育の三点を具現する方法として、伝統的に主要な教育方針の中に位置づけられてきました。わたしに与えられた課題はその再検討、特に「リベラルアーツを中心として」ということです。少人数教育は効率がよいということでなく、互いが知り合い、受け入れ合うための適切な環境と理解できるでしょう。そうして、リベラルアーツです。わたしは教育学の専門家ではありませんが、神戸女学院に連なる者として、継続的に、本女学院におけるリベラルアーツについて考えてきました。ここではシンポジウムの「発題」として、その「私論」をお話してご批判を仰ぎ、共にこのテーマを考える手がかりを得られたらと願うものです。

1．リベラルアーツの歴史

多くの皆さんには「釈迦に説法」となりますが、リベラルアーツはプラトン（前427–347年）やアリストテレス（前384–322年）が、教養的な学習と実用的な学習を区別したことに起源をもつと言われます。彼らは、自由民にふさわしい「高度な道徳水準」を形成させるものとして、教養的な学習を性格づけたと申します（ブラック，p. 56）。その見方からすれば、リベラルアーツは、われわれがいかなるものを理想的人間像として求めているかという事柄と関わることになります。プラトンはその課目内容として『国家』第7巻で、算術、幾何（平面、立体）学、天文学、音楽をあげ、その後、哲学関係の科目を学ぶよう勧めています（522E ff.）。われわれがよく耳にする文法（Grammatik）、弁証法（Dialektik あるいは論理学）、修辞学（説得術＝Rhetorik）、音楽（Musik）、算術（Arithmetik）、幾何学（Geometrie）、天文学（Astronomie）からなるいわゆる自由七科のリストは、すでに前1世紀には見られますが、定着したのは中世であったといわれます(Illmer, S. 157f.)。その卒業生が神学、法学、医学という、それぞれ人文、社会、自然科学を代表する道に進んだわけです。

余談ですが、わたしは2002年7月から8月にかけて学生を引率し、英国オックスフォード大学にまいりました。その大学図書館であるボードレアン図書館で、わたしの浅薄な読み込みに過ぎないのですが、印象深い体験をいたしました。門をくぐって四つの建物に囲まれた中庭を通り、図書館の正面入口に到着いたします。そこで振り返って入口を背にしますと、中庭を囲む他の三つの建物に、看板のついた扉がいくつか目に飛び込んでまいります。それぞれの看板には「天文学」とか「算術」など自由七科の表示がありました。ですから、図書館の正面入口を背にして中庭に立つと、学ぶべき教科がちょうど全体的に視界に納まるプランになっていると感じたのです。大学における課題が視覚的に示される。それらのどれも、自分で扉を開けて、中へと進んでいかなければならないわけです。また入っていきたくなる心持ちにさせるような、好奇心を沸き立たせる扉でした。リベラルアーツの伝統が象徴的に根を下ろしている光景が広がっておりました。神戸女学院大学も、音楽館と文学館と理学館とが図書館を中心に並び、その図書館と向かい合う位置にチャペルが置かれるプランになっていますが、本学の茂洋名誉教授もしばしばこのプランがリベラルアーツを体現していると指摘しておられました（神戸女学院，p. 82）。ウィリアム・メレル・ヴォーリスの設計による神戸女学院の建物にも、その伝統が脈々と生きているのです。

2．学習の強調点

ただいま七科目のスタイルは中世に定着したと申しましたが、その後この形式は、ドイツですと、ギムナジウムに引き継がれ、理科系の比重が増すなど、科目の枠が拡大されます。中世の段階で、幾何学には地理学や博物学、天文学には占星術が含まれていました。本学英文学科の鵜野ひろ子教授によれば、19世紀のマウントホリヨーク・カレッジにはすでに44課程あったといいますから（神戸女学院，p. 47）、リベラルアーツは伝統的な七科目の範囲を大きく超え

て、幅の広い体系へと展開されておりました。科目構成についていえば、規格品のように枠組みを固定してしまうのではなく、早くから再解釈が積極的になされていたと判断してよいでしょう。それらは、ある意味で時代の要請にしたがって選定されていたということであると思います。先ほどのプラトンが用いた言葉を援用しますと、社会の構成員として自身の役割を認識するために必要な教養が組み込まれたということです。このような経緯も手伝い、わたしたちはリベラルアーツが「幅広い知識」を指すという印象を受けるようになったのだと思います（宮田，p. 58）。

わたしがもう一つ注目したいのは、中世においては中等教育で文科系の三科（トリウィウム）（文法、弁証法、修辞学）、高等教育で理科系の四科（クワドリウィウム）（音楽、算術、幾何学、天文学）が学ばれたということです。プラトンは逆に後のトリウィウムにあたる「哲学的問答法」（ディアレクティケー）を最後に置き、これを強調していますが（『国家』532B　ff.）、ハスキンズが語る、中世においては「実際的な応用」のため論理学を重視した（pp. 45-47）という事柄を顧慮すると、優先科目についてプラトンと中世の方式とは深層面の意図を共有していたと言えます。こういうことです。すなわち、トリウィウムは、理解、表現（表明）、説得と翻訳できます。つまりその時代までに語られてきた共通認識、到達した事柄をまず理解し、自分なりの意見を構築し、他者を説得する。そうしていわばプレゼンテーションの手続きを修得し、当時の最先端の知識（クワドリウィウム）に向かい合う。恐らく、それらの新しい知識を身に着けるたびに自身の見解を創り上げ、効果的なふさわしいやり方で説得する作業を繰り返す。教員も、それがたとえ貧しいものであるとしても、根気強く耳を傾け、その形成を助ける。

わたしは、かつて神戸女学院からスイスのバーゼル大学神学部に留学させていただいた折のことを思い起こします。わたしは旧約学のゼミに出席しておりました。たいてい、旧約のヘブル語テクストを決め、それをめぐる議論をいたします。第１回目のゼミのテクストが決まりますと、わたしは日本でもしていたように、図書館で当該テクストの注解書や研究書にできる限り目を通し、詳細なメモを作成しました。ゼミが始まりますと、まずヘブル語のテクストを読みます。一区切りつくたびに、教員は、ここをどう読むか、なぜそう解釈するのかと質問をしてまいります。学生たちはそれに応えていく。彼らの答は、だいたいわたしが調べたメモにでてくる解釈のどれかです。たとえば、1920年代に活躍したあの研究者の見解だと、わたしには即座に分かります。いうまでもなく、中には光り輝くようなものもありますが、他方、とても博士論文執筆予定者ゼミのレベルには達していない稚拙なものや、すでに乗り越えられてしまった見解も提出されます。教員はそれらを丹念に聞いて次の質問を出し、学生はまた必死でそれに答えるという作業を繰り返します。わたしが先ほど、理解し、意見を構築し、それを表明・説得すると申しました根底には、その体験があります。対話のプロセスを学ぶ手順と言い換えられるかもしれません。教員も、学生の語る内容が初歩的なものにすぎなくても、決して踏みにじったり、揚げ足をとったり、退けたりすることなく、根気強く耳を傾け、次の問を立てる。そうして新たな対話へと進む。わたしは神戸女学院がリベラルアーツを採用する歴史を振り返り、合わせ考えるとき、その方式を、共なる成長を願う姿勢と言い換えてみたいと思うのです。

3．神戸女学院におけるリベラルアーツ導入の経緯

神戸女学院の創立者エライザ・タルカットは1873年３月、米国の宣教師派遣団体アメリカンボードから遣わされて、ジュリア・ダドレーと共に来日します。タルカットの来日最初の書簡は1873年４月12日付ですが、それによれば、彼女が神戸に対して抱いた第一印象は、風光明媚であること、そして町で出会う少女たちが大変魅力的であったことです。そしてもう一つ、彼女たちと「早く話し合えるようになりたい」とも書いております（神戸女学院，p. 11）。自分自身の日本語力を高める。その意味で共なる成長を願い、1875年、神戸女学院の出発点となるボーディング・スクール（寄宿学校）を創立しました。神戸女学院という学校が、話し合えるようになりたい（共なる成長）という願いから出発したことは記憶にとどめられるべきです。そこからわたしはリベラルアーツについて、次のように考えます。すなわち幅広い教養、判断力、総合力の育成等はその通りなのですが、その言い方以上に、理解し、批判や見解を構築し、それを表明して説得する力を養う方法という面が強調されるべきである。教員は共なる成長を願う思いをもって、根気よくそれに寄り添う。

神戸女学院においてこの教育プログラムが、漠然とであれ、構想されたのは、創立から間もない、1880年代のことであったと思われます。第３代校長エミリー・ブラウン（着任1882年）は、師範学校（ノーマルスクール）に倣ってはいけない、「ウエルズレイやスミス」をモデルにせよと申しました（神戸女学院，p. 26）。ウエルズレイ・カレッジは第４代院長スーザン・ソールの出身校で、当時すでに名門女子大学（Seven Sisters）の一つに数えられていました。またスミス・カレッジも後の第５代院長シャーロット・デフォレストの母校で、やはりSeven Sistersの一つです。これらはどちらも、マウントホリヨーク（創立1837年）に遡るリベラルアーツカレッジでした。内村鑑三が『後世への最大遺物』で述べるところでは、マウントホリヨークの創立者メアリー・ライオンは常々学生に「他の人の行くことを嫌うところへ行け／他の人の嫌がることをなせ」と語ったそうです（p. 65）。完結した既成の知識やシステムの機械的な伝授、あるいは再生産ではなく、一緒に考え、知・徳・体の共なる成長を志すプログラムです。学ぶ人はその中で、自らの生き方を深めてまいります。

このように神戸女学院の創立の経緯からリベラルアーツ教育を考えますと、学生の理解力、意識の構築力、表明力を養成する中で、共なる人格的成長を志す方法と要約できるのではないでしょうか。これは総合文化学科２月科別教授会で川村暁雄先生が報告された「神戸女学院大学の価値の確立のための将来展望・中期計画の策定に向けての提案」中の「リベラルアーツ教育」という項目で、「論理的な思考力、コミュニケーション力を有し、自己責任の原則の下に自立した自我を備えた人を育成すること」と記されていたこと、あるいは2000年秋、原田園子学長をはじめ本学のメンバー５人が在米神戸女学院財団の招きで訪問した米国クリーヴランド市のアーシュリン・カレッジにおけるリベラルアーツ・コア・カリキュラムで強調されていたこととも重なる部分があります（坂本，p. 142–146参照）。またリベラルアーツ・カレッジを標榜する国際基督教大学（ICU）の吉岡元子名誉教授がICUのリベラルアーツ教育の目標を、

①客観的思考能力、②批判的分析思考能力、③主体的問題設定、問題提起に向けての思考能力、④問題解決への思考能力、⑤論理構築のための思考力と自己表現へ向けての思考能力にある、と述べていることとも意識を共有します（絹川，pp. 11-17）。神戸女学院は、それらを修得する中で、隣人への視点、共生の視点、また自己相対化の視点を養うことを志すというのです。

4．自己相対化ということ

わたしは最初に神戸女学院の寄付行為からイメージされる人間像として、自己相対化、隣人の受容、弱い立場にある方々との共生への志をあげました。これまで述べてまいりました自身の見解を確立するという言い方が一人歩きすると、短絡的・直解主義的に、エゴイズムを助長する考えに結びつきかねません。むしろ、その考えを繰り返し検証する者でありたいと思うのです。「相対化」という言葉をもちだしますと、あるいはそれが価値ニヒリズムを引き起こすので安易にもち出すべきでないとの批判を受けるかもしれませんが、その批判に立ち止まってしまっては、新しい価値規範は生まれません。

20世紀の前半から半ばに活動した米国の神学者リチャード・ニーバーは、逆説的な言い方で、「相対化」とは絶対的なものを前提とすると語り、「神学的・神中心的相対主義」(theological and theo-centric relativism）を提唱しました（ニーバー，p. 5）。相対主義が内包する構造的な欠陥を超克し、結果として相対主義を活かすものが、神を想念する視点であると考えるのです。彼は、相対主義が人に三つの対応をとらせると申します。これをわたしなりにまとめますと、第一は、結局頼れるものは何もないのだというニヒリズムか懐疑主義へと至る相対主義。第二は、とりあえず何かを基準とする相対主義。彼はこれを、結局は相対的なもの（自己）を絶対視する偏向した相対主義と整理します。多くの場合、自分自身が基準となってしまうからです。そうして第三は、第二の対応のヴァリエーションと評せますが、絶対者をもって自身の相対性を受け入れる相対主義です。いずれにせよ、彼は「相対化」が「自己」に対してのみ、限定的・批判的に用いられるべき術語であると言っているのだと思われます。

リチャード・ニーバーの兄ラインホルド・ニーバーは、これに沿った考えを、旧約の預言者が培ってきた視点との関連で述べています。あまり長くお話しすることはできませんが、古代イスラエルの預言者とは、多くの日本人がその名称からイメージするような、未来について何事か不思議な予告をする人物を指しません。現実を見据え、状況に対して、批判的に発言した人々です。預言者たちが活動した主な期間はだいたい前８世紀から６世紀ですが、それはかなりのユダヤ人(ユダヤ人に限らず、とりあえず異民族に征服されていない民族・国家のどれも)が、自身を選ばれた特別な集団と位置づけた時代です。そのような中にあって、自身を狭隘な民族史ではなく、世界史の中に置いたという点で、彼らが自己相対化のルーツである（書かれたものの残っている人々の中でという限定つきながら）と人類の精神史を振り返って、わたしは申し上げたく思います。この自己相対化が、隣人への視座、あるいは弱い立場にある人たちへの思いに拡がってゆき、イエスの思想の源流となりました。神学者ヴォルフハルト・パネンベルクは、「神中心」という表現を避けて、「自由と平等による基本価値」(die Grundwert von

Freiheit und Gleichheit）という言葉をそれにあてています（大木，pp. 235ff. を参照）。自身の価値観を、「自由と平等」という基準に照らしてみるということです。これも相対化の一つに数えられます。

わたしがここで述べてきたような、学習の方法としてのリベラルアーツは、小なるものへの視点を欠き、力の論理を押し進める精神風土にあっては、意識して「自己相対化」の視点と共に運用する必要があると考えます。もちろん言うまでもなく、多様な科目を学ぶことそれ自体も「自己相対化」を内包しております。しかしそれは副産物にすぎません。わたしはいま一歩、派生的な自己相対化から自覚的なそれへと踏み込む必要を強調しておきたく思います。

5．結びに代えて

リベラルアーツは、自身の見解をさまざまな立場から検証し新たに自己を発見してゆくという点で自己相対化を目指すと申せます。単に自身の見解を構築するということではなく、隣人の視点から、自身の見解を検証する手続きを含みます。かつて古代ギリシアの哲学者は、「高度な道徳水準」の形成を教養学習の目標としました。この学院に学ぶ方々が、隣人への視点と出会い、世界の中に自分自身を、また自身の場や言葉を見出してゆくための応援をなすことが、わたしども教育機関に連なる者としての務めではないかと思います。わたしたちが構想するリベラルアーツも、そこまでを射程に納めるものであることが望ましいと考えます。自身の見解を構築する。その際に、自己相対化の視点と、合わせて社会に苦しむ人や集団、他者を真実に活かすものは何であるかに思いを馳せる。そうして、これらの事柄に応答する自身の生き様をデザインしてゆく。わたしはリベラルアーツ・プログラムを、このように構想したいと考えております。

現代の大学は、プラトンのアカデメイアや、中世以降、一部のエリートが通ったコレギウムあるいはウニヴェルジタスと同じではありません。社会制度も大きく変わりました。卒業するだけで何かの資格を認定されたり、各種の枢要な職が保証されるという時代ではありません。細分化され、制度化され、何かに使命感をもったとしても、職に就く以前にまず多様な資格が求められます。神戸女学院大学の全体に向けられた資格取得支援プログラムも充実してきました。プラトンらが行ったように教養の教育と実用的な教育、すなわちリベラルアーツと資格取得のコースとを端から二項対立的に位置づけるよう、固定的に考える必要はないと思われます。逆に実用的な課程も自身の枠に取り込むかたちで、少し大胆に、課外も含めて、支援する体制をも備えたリベラルアーツを構想してはいかがかとのヴィジョンを述べて、この発題を終えることといたします。

〈参考文献〉（引用順）
坂本辰朗『アメリカの女性大学：危機の構造』東信堂　1999年
R. S. ブラック（内山勝利訳）『プラトン入門』岩波書店　1992年
プラトン（藤沢令夫訳）『国家』岩波書店　1979年

D. Illmer, Art. “Artes liberales”, Theologische Realenzyklopädie IV S. 156–171.
神戸女学院『神戸女学院の125年』神戸女学院　2000年
宮田俊近『アメリカのリベラルアーツ・カレッジ』玉川大学出版部　1991年
C. H. ハスキンズ（青木靖三他訳）『大学の起源』法律文化社　1970年
内村鑑三『後生への最大遺物　デンマルクの話』岩波書店　1976年
絹川正吉編『ICU〈リベラルアーツ〉のすべて』東信堂　2002年
H. R. ニーバー（赤城泰訳）『キリストと文化』日本基督教団出版局　1967年
大木英夫『新しい共同体の倫理学（上）』教文館　1994年